

このコーナーでは、この地域に伝わる民話を紹介し、皆さんからの感想画を募集しています。紹介する民話は、子どもたちに、ふるさとの伝説や昔話を教え、遠い祖先の心や、郷里のぬくもりを少しでも感じてほしいと、松浦市教育委員会が平成4年に再編した「松浦の民話」という本から引用した話です。

長坂という所に、それはよく働く、伍作さんというお百姓さんがいました。

朝早くから夜遅くまで、田畑の仕事を精をだしていました。

ある日のこと、その伍作さんが、朝から湯を沸かし、ぶしよつひげを急入りにそっているではありませんか。通りかかった近所の人々が、ちよつと驚いて言いました。

「いったい何事な。朝からひげはちよつと。」

「いや、なに、その、佐々村の方にお祝い」

儀に呼ばれましてな。」

伍作さんは、ここにこしながらそつとこいつつちよつらの着物を着込み、ほこりをぼんと払いました。そしてお祝いのお包みとお米を重箱に入れると、えへん、おほんと咳払いも軽く家を出ました。途中、刀の越えという峠を越え、直谷を通り、やがて、屋近く、呼ばれていた親せきの家につきました。

おめでたい結婚式です。披露宴も、

伍作どんとこうぞう鳥のかか

「ぎやかです。伍作さんは、大好きなお酒をたくらぐ馳走になりました。いただいたお土産をわたつと、いならで作った入れ物」に詰め、何べんもお礼を言って帰り道につきました。

今朝来た道をそのまま戻り、梶木場の山坂道に差し掛かりました。ころへ落としの秋の日は、もうそのころになると、沈んでいます。そして十二夜ぐらゐの月が、東の空に上がっています。伍作さんは、「しもた。ちよつちんば借ってくればよかったです。」

とつぶやきました。でも、月の光でなんとか帰れるだろうと思ひ、薄暗く木の生い茂った山道を急ぎました。

この山道は、厚間は少し人通りがありますが、夜は全くありません。道も狭く山も

深いので、厚でも、女の人や子どもにこつこつはびいといとこつと歩きました。

月の光が木と木の間に漏れるので、どうにか歩けました。

ちよつやく伍作さんは、峠にたどり着きました。冷たい風が、伍作さんの顔をなぞるよつと吹いていきます。思わす、背筋がぞくぞくと寒くなりました。丈夫な体といかつい顔の伍作さんも、本当は人一倍臆病な人だったので。

「急がにや。こぎゃんさびしか所は、はよ通り過ぎんば、ろくなことほな。」

お土産の入ったわたつとを、また持ち直して歩きました。

グキヤ、グキヤ

突然、伍作さんの頭の上の方で、化け物のよつな声が響き渡りました。

まるで、人が絞め殺されるよつな泣き声です。伍作さんは、びっけりきよつとん石につまずいたり木につき当たったり、草やぶに駆け込んだりして、死に物狂いで走りました。やっと、すすきの生い茂った野道に出ました。少し行くと、杉山があります。もう人の家も近いし、この杉山をえ抜ければ大丈夫、と思つた伍作さんは、杉山のはすれで立ち止まりました。そして、額の汗でも拭こうと、腰に下げた手ぬぐいを顔に当てたときでした。

またしても今度は、さつきよりも一段とはげしい泣き声が夜空に響いてきたのです。グキヤ、グキヤ、グキヤ、グキヤ、グキヤ

伍作さんは、生きた心地もしません。ぺたんこ座りそつこなるのを、やつとろろえとまた走り出しました。

化けもんだ。化けもんに違ひな。おれを追つて来ぬとたい。」

やつこのこつと、一軒の家に着きました。その家の人は、囲炉裏の火を消し、ランプの火も細くし、休もうとしていたところでした。

戸を叩く音に驚いて、戸を開けました。見るところには、ランプの光でもはつきり分かるほど、真つ青になった伍作さんが、わたつとを下げて立っています。

伍作どん、いったい何事じゃすな。こぎゃん夜中。」

「こつこつかく、水は一杯飲ませんや。」

伍作さんは、その家の者の差し出す茶碗の水を、うまそつこつとぐんぐんと飲みました。

「いや、もう、祝儀に呼ばれて、佐々村に行つたら、暗つなつてもつてな。刀の越の山の中で、ものすこか気味の悪か化けものんの声が響き渡つてき、肝つ玉の縮み上

がつてもつて、と、びびりきやんかけたか、由は飛ぶ心地じゃつた。」

そつと伍作さんは、汗びつしより、いつちよつらの紋付は、どうまみれになっていました。

「りや、こつこつ鳥のかかあじゃなかつたか。」

「つんや。ありやあ、たしか、化けもんに違ひな。あぎやん声、今まで聞いたことほな。」

「つんや、伍作どんが、ちよつらの入つてゐるわつとば、ぶら下げて歩きよつたせんと遠方からでもよかにおいのぶんぶんとたいた、そつと、腹の減つた山のけものやこつこつ鳥の騒いだつた。後からは、きつねもつとつたじゃろつな。」

「なんじやそつと。」

伍作さんは、思わす身震いをしました。それにしても、お祝儀でもつたお土産の品もんは、大丈夫な。」

とつと、伍作さんは、手に下げたつとをそつと開けてみました。

とつとが、鯛のお頭付き、おいしいかまぼこ、ちくわ、野菜の煮しめなど、たくさん入っているはずのわたつとの中には、何もありません。

ただ一切れ、里辛の煮つけが残っていただけでした。

(志佐町上志佐)



中世の松浦 (31) 鷹島海底遺跡

海底遺跡の調査で漆製品が出土していますが、さまざまなものに漆が使われています。

武器では、弓・弩弓、矢束となつている一本一本の矢柄に、矢筒の皮袋に塗られていたと思われる漆膜、錆で膨れ上がった刀の鞘にも漆が塗られています。武器では皮鎧の小札の一枚一枚にも厚く塗られています。

生活用品では漆椀、装飾用の櫛、さらには経典折本の板表紙にも漆が塗られています。このように万能塗料である漆がさまざまなものに使われています。写真の漆椀は、九州国立博物館でのX線CT調査の結果、内面の木質の上に朱色の漆が施され、その上に黒漆の皮膜が輪花状に胴部から見込みにかけて施されています。椀の素材はスギ属の木で、薄く削つたものを巻き上げて布着せを施して器地になっている巻胎漆器で、日本にはない技術で作られていることが確認されました。

また、漆製品の分析結果から製作技術は日本では沖繩(琉球)に伝わっている以外には見られないものも多くあり、一部は中国江南地方および以南の技術であることがわかってきました。



▲漆椀 (九州国立博物館へ貸出展示中)

松浦の民話イラスト

読者の皆さんから寄せられたイラストの審査結果を以下の通りお知らせします。

先月の民話「**いたちと強松さん**」のイラストに、5通の応募がありました。ご応募ありがとうございました。



【最優秀賞】

久原 友美さん

(御厨・御厨団地、12)

「強松さんとイタチがばったりと出くわした場面がよく表現されています。特に、びっくりして慌てるイタチの様子がその表情によく現れていますね。」(いの)



【優秀賞】

ペンネーム うさぎちゃん (志佐・里2、6)

「イタチとの我慢比べに勝って、大喜びする強松さん。やっとの思いで捕まえたイタチを手にながら、本当に嬉しそうな顔をしていますね。」(いの)



【優秀賞】

ペンネーム くまくん (志佐・里2、4)

「強松さんの前に飛び出してきたイタチの様子が可愛らしく生き生きと描かれています。イタチを見て捕まえようとした強松さんの気持ちも伝わってくるようですね。」(いの)

■あなたの力作を募集!

— 民話の感想画募集 —

右の民話を読んで感じた情景をイラストにして、必要事項を記入の上左記まで持参、郵送またはメールにて送付してください。応募いただいたイラストは審査をし、上位のものを次の市報で紹介いたします。

【応募資格】住所、年齢、性別など何も問いません。ごなたでも応募できます。

【イラストの規格】はがきまたはA4サイズ以内の紙に絵の具やクレパスなどで書いたカラーのもの(色鉛筆の場合は濃く塗ってください)。

【必要事項】住所、氏名(ふりがな)、電話番号、年齢、職業(学校名)

※掲載する場合、ペンネームを希望する人は、ペンネームもご記入ください。

※はがきで応募される人は、必要事項を表の下部に記載してください。

なお、いただいた個人情報(民話コーナー以外には使用しません)。

【応募締切】6月10日(金)必着

【応募・問合せ先】

〒859-4598 松浦市志佐町里免365番地

松浦市まちづくり推進課 秘書広報係

☎0956-72-1111 Eメール=hisyo@city.matsura.lg.jp

※福島支所、鷹島支所、そのほかの各支所でも受け付けています。